The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	土橋家旧蔵書目並に解説
Author(s)	
Citation	語文. 1954, 12, p. 44-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68462
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

土橋家旧蔵書書目並に解説

はしがき

土橋家は大阪平野郷の七名家の一である。七名家とは、土橋、井上、末吉、三上、成安、辻葩、西村の七家をいふ。いづれも坂上田村麻呂の子、広野麻呂の裔である。平野は広野麿の領有地であつた。そこで、その子孫が代々この地に居住し、分れて七家となつたのである。土橋家は広野麿より数へて十七代目（或は十八代目ともいふ）坂上利良を以て祖とし、利良より六代目政長に至り、土橋を以て氏とした。

ところで、土橋家がわが大阪の地に於て文化史的意義をもつたのは政長より更に十三代目ののちに当る土橋友直が含翠堂を設立したからである。友直は泉州貝塚の三宅友政の男で、少にして土橋保重の養子となり、土橋家を嗣いだのである。彼は、少くして京に上り、居ること三年、河瀬菅雄に歌学を、後藤艮山に医学を学んだ。また菅雄の門で、三輪執斎を識り、執斎にも教へを受けた。友直は一代の傑物であつたやうである。父祖の業たる売薬業を継ぐともに、惣年寄となり、平野郷の代官となつた。京都より帰郷するや、まづ郷学を振興せんことを志し、はじめ自宅に講筵を布き、のち同族に助けられて、含翠堂を創設した。大阪船場の懐徳堂とともに、わが大阪が天下に誇る民間経営の学塾である。含翠堂の創設は、友直三十一才、享保二年（西紀一七一七年）のことであつた。爾来、明治の初め新学制の布かれるまで、この塾が続いた。含翠堂の位置は、今の大阪市住吉区平野京町三丁目、市バスの停留所附近にあり、杭全（くまた）神社から約半町東に当る。その跡は已に残つてゐないけれども、これを管理してゐた土橋家は今に連綿と伝はつてゐる。そして、含翠堂の蔵書は、杭全神社に保管せられることになつたらしいが、その遺物は、土橋家の古文書と共に土橋家に伝存せられた。

元来、この平野の地は文芸に縁りのある土地柄であつて、この地の杭全神社には古くから連歌所があり、神社行事として年々連歌の催しがあつた。友直やその一族も、この連歌所の連歌に参会し、多数の作品を残して居る。また、宝永三年（西紀一七〇八年）には此処で河瀬菅雄を宗匠として和歌三百首の献詠を行つたりしてゐる。今日土橋家の文書を見るに、友直は、京都の里村家に入門して連歌を本格的に学んでゐるやうである。

含翠堂及び土橋友直等のことは、森繁夫氏の「含翠堂考」に詳しい。仍つて、委細はその書に譲つて略しておくが、先年、この含翠堂考に載せられてゐる含翠堂の木額をはじめ含翠堂遺物及び土橋家の文書が、国史の藤直幹教授の斡旋により、あげてわが阪大文学部の有に帰した。そのうちの文学関係の書物を、田中裕助教授が整理し、その書目を作成した。この中には貴重すべきものも含まれてゐて、一往これを活字に移してわれわれの学問上の便宜をはかることの必要を感じ、藤教授の諒解をも得て、「語文」にこれを附載する

ことにしたのである。以下解題するところの所謂土橋家旧蔵書が即ちそれである。

土橋家の旧蔵書は、含翠堂関係のものと、文学に関するものと、そして土橋家の旧記文書の類とに三大別することが出来る。そしてここに解題しようとするのは、そのうちの主として文学に関する書籍であるが、その文学に関する書籍には、連歌書歌書が大半を占めてゐる。そして、また連歌書歌書のうち最も多いのは土橋一門の参加してゐる連歌懐紙の写本とか和歌の類である。また、友直をはじめ、その代々に好学の士が多く、連歌や和歌を嗜む人もすくなくなかつたので、それらの好学の人達が写し伝へておいた連歌書や歌書があつて、その中には貴重すべきものもあるやうなのである。土橋家の人々の作品には、文学的価値を多く期待し得ないが、郷土史的興味に於て珍重すべきものがあり、またそれらに混つて、西山宗因、河瀬菅雄、三輪執斎等の名家の作も見出だされるので、おちなくそれらの作品集をも録することにした。また新撰つくば集その他の写本類はもとより古典研究のよすがになり得るのであるから、異議なく収録してゐる。

含翠堂は、懐徳堂とは深い関係をもつてゐる。懐徳堂の創設者三宅万年は、含翠堂にも講師として招請せられてをり、享保九年の大阪大火には万年は難を平野に避けてゐる。すなはち、この時、万年の門弟たちが含翠堂に師を見舞ひ、含翠堂の規模を見るに及んで、これに啓発せられて懐徳堂建立の志を興したと言はれる。その後も五井蘭洲、持軒父子、三宅春楼、中井竹山、履軒兄弟、中井蕉園、並河寒泉等代々の懐徳堂教授が来つて講義をして居るし、含翠堂といふ塾名がそもそも三宅万年の命名するところであつたといふ因縁もある。従つて、含翠堂文書には、懐徳堂に関係浅からざる人々の書き残した筆跡が残されてゐる。また、含翠堂講師であつた河野菅雄や三輪執斎、伊藤東涯等の書も多数収蔵せられてゐる。執斎の土橋友直の死を弔ふ文や含翠堂記などは長文の和文で、而も名文である。かういふのも、これらの名家の伝記資料ともなるべく、またその文学を考へる場合の参考ともなるものであらうが、このたびは、とりあへず、土橋家蔵書中から主として連歌和歌和文関係のものについて、目録と解説とを附することにした。これらの書の利用価値は学者の力に俟つことにして、解説は簡要にとどめた。尤も、これらの中には、以前土橋家に在つた頃から一部の学者に知られてゐたものがあつて、敢へて新資料といふべきものでないかも知れぬ。ただ、われわれの研究上の便宜のためにここに記録しておくのみである。

本目録並に解説は、田中助教授の執筆するところ、不備の点は大方の示教を待つ。

一　連歌論書

1 筑波問答　一冊

諸本に見える「応安第五天初春……」の奥書はなくて、たゞ「右帰舟斎紹与かきて愚筆に取かへらるゝもの也」とばかりある。しかし本書はこの紹与（紹巴門）自筆本の転写で、江戸初期の写しと見られる。書写は、厳密で本文もよく、類従本を正しうる個所が少くないが、ことに文中「懐中より一通をとり出し侍しかばありのまゝにうつしとゝめ侍る也」の次に「連歌式目」の一項を掲げてゐる点など式目介在の痕跡を示す一本で、注意される。

2 知連抄　一冊

本書は上下二巻を合せ、下巻の奥に「抑此心抄者云応安第七二条殿太閤依当関白殿之御所望抽和歌肝要□遣之也周阿九州下向之時最初計御草案之時分申下令所持〻〻但上落之時被召返於御前焼失畢然共聖□院の竹薗御数寄之間嘉慶元年十一月名世風躰此心抄二通被書献也当道奥儀口伝不可過之可秘〻〻

永正七年庚午五月晦日　之書畢」

とある。永正の古写といひ、殊に二巻を完備してゐる点、京都大学平松家本知連集と共に注目される。本文を見ると「上巻」は平松本・東北大学本（上巻のみ）等と比べて相互に精疎欠脱があるが大異はない。たゞ後の二本には奥に、周阿が西国下向の折、良基から本書を申請けて所持したが九州には留めず、周防に一本を留めた由の奥書があるが、土橋本にはない。代りに「下巻」に前掲の詳しい奥書があるわけで、これは図書寮本（宝徳四年写）のそれと略〻同文であるが、所々に誤写（□・（）印で示した）がある。本文もまた同本と略同じであるが、式目の部分に誤写脱文が目につく。しかし一方図書寮本の誤りは殆んど本書で訂正することができる。平松本はこれら二本に比べると本文が簡略で異交も多い。後の追加の部分もあらうが、所詮、本文成立上の異つた段階を示すものといふべく、前者が一層整理されてゐるといへる。ともあれ諸本中最も準拠となるのは図書寮本であらうが、しかしこれは上巻に当る部分を欠いてゐる。その現形を見ると必ずしも零本とはいひ難いのであるが、しかしこれと同系統に属すること前述のやうな土橋本では明らかに別に上巻をもつのであるから、図書寮本もその書写以前にすでに上巻に当る部分を失つてゐたものと推定したい。このやうに土橋本は種々の特色や問題をもち、その存在は貴重されねばならないと思ふ。なほ本書については「古典文庫良基連歌論集二」に校訂者岡見正雄氏の解説が見える。

3 初心抄　一冊

室町期の写で、「初心抄」の後に「二条殿日発句」と「新式目歌」とを附載してゐる。初心抄は奥に「寛正三年八月廿九日心敬在判」とあるが、内容は所謂「専順法眼之詞秘之事」に等しい。詞秘之事は国語学大系第十四に内閣文庫本や高野辰之博士蔵本「宗祇一札」が飜刻校合されてをり、外にも種々の名で伝はつてゐる（平松本「宗祇作初心書」等）が本文の間に大差はなく、たゞ最後に「此一帖雖憚入候御心ばへ色々遊共打すてられてこの道に……」といふ意味の一文が附くか否かの差であらう。（内閣文庫本はこれがなくて、発句切字十八之事など約十枚に亙る記事が加はつてゐるのは後の追加と思ふ）しかし土橋本は右の一文の外に、本文中二個所において異文を含んでゐるのが注意される。第一は右の一文の前、「別而祈禱連歌之事」の次に、「春秋の発句の時は第三までは同季候はではかなはず候……」以下「てにはの事」に至るまで約二十条の式目に関する注意が見えることである。その中三条ばかりは「心敬僧都庭訓」中に類似の文をもつ。また専順・宗砌の評語、惣持坊の付句も引かれてゐる。第二は冒頭の「連歌の事いか様に御けいこあるべき哉らん、御尋に付て愚意の思所あら〳〵申入候」の次に「むかし二条殿□おほせられし連歌のかゝりも今摂政殿の御気色歌に宗砌の宗匠の時申おもむき肝要の子細ばかりをしるし

御不審共にくわへ候」とあり、次いで「一、条々の事」として発句に祝言と神祇ととりむかはれ候はゞよき発句はあるまじく候……」の一条が介在することである。前者はこの初心抄の後に二条殿日発句と新式目歌とが附いてゐることに対応する文言で、これによると右の二篇は本来こゝに附載されてゐたことになる。さて本書には前掲寛正三年の心敬の奥書がついてゐるがこれは「さゝめごと」著作の前年に当り、心敬のなほ十住心院に在つた時と思はれるが信頼できるであらうか。たゞいへることは、叙上の本書のみの有つ条々はその内容において格別心敬作とすることに支障を示さないのが注意されるが、本書全体の構成からみて、その配置にやゝ不自然の感を懐せる点があるやうにも思ふ(殊に冒頭の第二条)。本書の写は優秀であるが、第五紙の次に一枚の脱落がある。巻末の二条殿日発句は正月一・二・三・六日の四句のみ。新式日歌は標題の下に「宗砌」と記され歌数六四首。宗砌の式目歌は平松家本「専順法眼之詞秘之事」や、宗砌「連歌用意鈔」に附載されてゐるものは十二首乃至二八首で他に四十六首をもつ本もあるといふが、本書では更に多い。なほ検討を要するであらう。

4 一　言　一冊（他と合本）

イチゴンと傍訓してある。横本十行書き四枚の小篇で、奥に日附はなくてただ「興俊江　心敬在判」とある。興俊は心敬が文明二年初秋に「芝草」を書き与へた会津の大徳であらう。内容は寄合を捨てゝ、てにをは・心・詞によつて附けよといふ趣旨のものであるが、簡潔の中に細かさがあり、心敬の見解一般に比しても、別にふさはぬものと思へない。中に寄合を評して、「只賀茂のまつりに数千度とをりたる物を見るがごとく也」とある言葉は前記初心抄の土橋本固有の部分に見え、更に知連抄下巻（図書寮本・土橋本）に発してゐる。ともかく他に同種の伝本を聞かないので注目される。本書は後に、十四条から成る宗長説の聞書を合はせ、その奥に「慶長十八年癸丑林鐘念二冀貞俊斎作□□御本貸被下写畢」とある。中の四字は判読しかねるが、蓋し慶長の写で貞俊は土橋氏法名道夢（元和二年歿）であらう。

5 心敬芝草奥書　一冊（合）

寛延元年十二月二十五日土橋宗信写。本文は続群書類従所収の心敬僧都比登理言に等しいが、奥書は「応仁二年八月晦日　心敬書之」とあつてやゝ異つてをり、更に前者のもつ「文明十一年……」の奥書はない。類従本の誤脱を訂しうる所も少くないが、所々の脱文も目につく。最後に「今彼古席に臨みしは法眼専順又心敬等、是もはるかに山川をへだてゝかうがんあることなし。自他存知たりといへども又如夢幻泡影如露亦如電如何思量歟不思量歟」の一文が加はつてゐる。なほ外に自句自注の芝草の断簡を含む一冊もある。即ち「芝草の道のくち葉ども拾ひ給て……」に始る序、次に「芝草句之内　次第不同」と標記して自注発句三句を存してゐる。本文は、明応本に最も近く、朱で校合もして丁寧な写ではあるが、断片にすぎない。

6 若　草　一冊

奥に「右一冊於南都兼載公作分号若草也」とあり、更に「天正八年臘月上旬平野庄土橋良秀依御所望亀手不顧其憚応友命者也松千代十二歳」とある。良秀は利保の法名であるが、土橋家の

系図によればその翌年は永祿二年二月十五日とあり、一説に天正中ともいふ。恐らく後説が正しいことにならう。本書は善写であるが天正八年本そのものではなく、その忠実な透写と思はれる。後に同筆で兼載独吟何人百韻（発句　雲晴て鷹がねなびく外山哉）を附載してゐる。

7 連歌比況集　一冊

標題はないが、序に「友人是を一覧して則連歌比況集と名付く……」とあつて書名は明らかであり、また序にいふ宗祇との関係からみて宗長作とする説がよい。序の次に目録があり、「蓮の茎」以下「大的」に至る四三項目を並べ、それに順つて本文がある。順序は桂宮本（図書寮典籍解題による）と相違する。善写であるが、「大的」の項の末尾に少くとも一枚を欠脱してゐる。従つて奥書は分らないが、江戸初期の写であらう。

8 於湯山両吟百韻注　一冊

文明十四年二月五日の宗伊・宗祇両吟何路連歌の注で、宗祇自注と思はれる。

「鶯は霧に咽て山もなし

梅薫る野の霜寒きころ

発句のこゝろ山さへ見えぬ朝霧にうぐひすのむすぼれたる歟初春の心にて候間其時節のなり斗に候」とある。江戸初期の写。

9 水　蛙　一冊

前半は付合の書で、「歌に、水にすむ蛙花に鳴鶯」以下「武蔵野に春日野付は」に至るまで二四〇条から成り、題名は第一条から出てゐる。いづれも和歌・物語等に出典を求めて寄合の根拠を示し、また七賢や宗祇・兼載等の例句を掲げてゐる。後半は語の注解を施したものであるが、形式は前半と同様で、「まとゐ」以下「豊の明」に至る一二八条から成つてゐる。福井久蔵博士「連歌の史的研究後篇」所収の内閣文庫本水蛙抄は右の前半と同種のものごとく、その奥書によれば明応三年秋の著作らしいが、本書には記載がない。

10 随　心　集　一冊

慶安四年仲秋　三宅玄賀写。二本を蔵するが一本は他の写しで、原本（揭出本）は袋綴の横本。奥に「此一冊者垣屋続成所望いなみがたくて手にをはの大概ばかりしるし侍りき其後徳丸成長宇津堅頼両人依所望以世俗言詞付様行様大方書之仍為世俗者也

于時永正十六己卯天三月吉辰沙弥随心」とあり、次いで「追加」の本文があつて奥に

「従吉田左近広典被所望而所持者也　（岡）国屋丹後守永全判」

とある。

本篇は「発句切字之事」にはじまり四四条、追加は「名所を結ぶ句之事」以下十三条。宗砌・宗伊・宗祇・基佐等の句、語が見え、奥書によつて本来の書名は「世俗」であることが分る。

11 至　宝　抄　一冊

本書は「此一帖は日の本を……」にはじまる天正十三年秋の法橋紹巴の奥書ある写本。(12)の刊本とは異同があり、後半の「言葉」の注文は一層詳しくなつてゐる。

12 至　宝　抄　板本一冊

大本、二八枚で奥附はない。

13 連歌新式抄（仮題）　一冊

慶長十七年五月二十一日　円恵法印写。跋に「右一巻尾州蜂屋

兵庫助頼隆以一書臨江へ伺之時新式に無相違とて大方記付被送之……」とあり、紹巴が頼隆に送つたことが分る。（頼隆は天正三年三月八日、何船百韻を興行してをり、発句紹巴）本文は「韻の字」「物の名」以下「鞠の庭・法の庭」に至る。新式の実用的な抄本であり、解説書である。

14 連歌初心抄　板本一冊

寛永四年仲秋刊。題簽は剝落してゐるが、奥に「右一冊者私に書置候を童子に教為初心の学所にと被仰候間注之…了意在判」とあり、浅井了意の連歌初心抄である。用語を月分けに排列して証歌をあげ、次いで「発句の心持……」以下「付合」に至つてゐる。

15 四季景物　一冊

内題の下に「昌琢作、かな付とも琢筆ノマヽ」とある。正月物から十二月物に至る月分けの季語寄せで、まゝ訓み仮名を付け「三月ニ渡ル」等の注記を加へてゐる。宗祇初学抄などより詳しいが、季の所属の変つてゐる語も少くない。奥に「右以渡辺宗賢自筆本写之」とあり、土橋宗信の書写と推定される。なほ宗賢は摂津池田住の好士。

16 法眼昌琢説聞書幷寛佐聞書　一冊（合）

延宝四年三月下旬　土橋宗静写。いろは四八部に分類した式目の書で、部毎に昌琢説聞書と寛佐聞書とを分け載せてゐる。（寛佐は琢門の高足で、豊後円寿寺十四世。その一座した連歌は旧蔵書中に少くない。）次に「連歌不審条々宗祇宗長尋明」及び「賦物篇」を合冊してゐる。前者は両者の式目説をそれぞれ纒めて列挙してあり、奥に「巳上弐百五十余ヶ条　明応九年六月四日宗祇宗長撰之畢」とある。当時宗祇は在京したが、宗長は疑はれる。後者は奥に「享徳元年壬申十一月日一条殿御作云々」とある。

17 廿一代集所賦地名付合（仮題）　一冊

土橋宗静筆。貼紙の錯綜した厚冊で草稿とおぼしく、恐らく筆者の著であらう。いろは分けで、勅撰集所賦の地名とそれに付合ふ語を一つづつ対照してあり、証歌も幷せ載せてゐる。例へば、「いゐ」の部は「岩のかけ道　吉野。雪ふかき岩のかけ道あとたゆる吉野のさとも春はきにけり　待賢門院」の如くである。

18 愚問雑記　一冊

寛文二年十一月五日　土橋宗静筆。自作か。本文は「いづて舟」以下の舟名、「秋つはの衣」以下の衣名、他に「四季衣色々」「詞色々」等の項を設けて語彙を集め、万葉・古今序・源氏・紀・八雲御抄・神中抄・俊頼無名抄等を引いて注解を施したもので主として連歌のための用意であらう。

19 付合小鏡　板本一冊

延宝七年孟夏　野田藤八刊の中型本と貞享二年三月　永田長兵衛刊の小本との二本を蔵するが、刊記を改めた外は板は同一である。右の延宝板の前にも小本が出されてゐたのではないかと思ふ。

20 連歌安心集　板本一冊

寛保三年四月豊前宇佐安心院重清の著。改装されて序・跋等本文の外のすべてを失つてゐる。(19)(20)は略〻同じ形式のもので、四季以下恋・述懐・釈教其他各部に分けて語を集め、各語につ

いてそれぞれ付合を示し、証歌を挙げてゐる。

二　連歌選集・句集

1 新撰菟玖波集　二冊

上下二巻で、巻第十恋連歌下までが上巻。巻頭に序、巻末に、「作者部類」を附してゐる。諸本と対校してみないが、流布本（続々群書類従所収）との相異をいへば、集中の「読人不知」はすべて朱で実名を注し、更に作者部類の末にそれらを一括、巻別に列挙して「以上五十二句」とある。流布本にはないが、「僧」部の末、愛益丸以下の記載がほぼこれに該当する。作者名・句数（朱で注す）にも異同が少くなく、流布本の誤脱を訂正すべきものが多い。句は巻十一に一句、巻十三に十三句、巻十九に二句、いづれも本書が多く、巻一に二句、巻三に一句、巻十一に一句、巻一八に一句を欠く。概して流布本のイ本に一致する。奥書はないが江戸初期の写であらう。

2 竹　林　抄　三冊

元文四年六月二十日　土橋包白（八三郎）写。もとの奥書に、「本書云以撰者宗祇本所令書写也」とある。上巻は巻第四冬連歌まで、中巻は巻第八雑連歌上まで、以下下巻。巻頭に序、巻末に「竹林抄句数」がある。即ち宗祇三五一句之内発句四二、賢盛二二九句之内発句二三、行助一五六句之内発句二七、心敬三九七句之内発句七九、専順三二三句之内発句六九、智薀一九一之内発句二二、能阿一七一之内発句一八、已上一八一八之内発句二八〇句とある。本文についてはまだ詳しく調査してゐない。

3 老　葉　二冊

上巻は第五旅連歌までゞ、本文の末一枚を欠き、下巻は本文を完備してゐるが、その末に剝落の痕がある。奥書を失つたかと思ふ。室町末期の写で、本文は天理図書館綿屋文庫の無注本に近い。

4 老　葉　一冊

奥に「宗祇付句を後より上卅句之内肖柏合点十一句　文亀元六月日」とあり次いで「慶長十六年弥生十六日書之」とあつてその奥は截り取られてゐる。恐らくは右慶長本の転写であらう。(3)と同様、再編本に属してゐるが、それともかなり異る本文をもつてゐる。

5 壁　草　一冊

内題は「壁草聞書」とあり、「旅連歌」までを上、「恋連歌上」以下を下とする。即ち壁草の附注本であるが、自注ではないやうである。奥に「宗長在判」とある自跋があつて、略〻続群書類従本のそれに同じく、たゞ「壁草といはんといへばさもや有べからんとて」の次に「打わらひぐさなを文亀より永正九年の昨日今日まで」とあつて前者の脱文を補ひ、かつ成立年代を示してゐる。その次に「右此聞書者切々以懇望扱覧時停止外見旨堅以誓約摸之……天正八年巳亥林鐘中澣日　右筆宗恵」次いで漂陀（予）盛」最後に「元禄九年春三月日　白雲軒写之」とある。

6 発　句　帳　刊本四冊

寛文六年仲秋　長尾平兵衛刊。四季を四巻に分け、七賢以来心前・玄仍に至るまでの名家の句を集めてゐる。

7 長州一之宮奉納発句　刊本一冊

元祿十年三月板。堺の西脇利房編。内題に「長州一之宮奉納短尺百枚」とあるやうに利房が願主となつて長門住吉社に納めた発句短冊を印行したもので、元祿五年九月の昌陸の跋がある。昌陸・昌純、西山宗春、岡西惟中等の外、平野の作者として土橋宗静やその子正俊、末吉宗久・奥野清順等九人の句が見える

8 連歌梅のしづく　刊本二冊

正德四年正月　糟淵権兵衛刊。正德三年六月廿余日、加州小松の観生の序と同じく小松の松原維忠の跋がある。本書は北野の観明軒法橋能順の家集で、歿後に門人観生がその三十年来の発句を蒐集刊行したものである。

三　西山宗因連歌作品

〔題名の下に※印をつけたものは、頴原退蔵博士「西山宗因年譜」「俳諧史の研究」所収〕に見えないものである。

1 琢出座※　一冊

昌琢の発句に始るその一座十巻の合集であるが、うち第七巻何人連歌に豊一の付句七が見える。連衆は昌琢以下宗為・玄仲・禅昌・慶純・玄的・了倶・昌穩・行生・政直・豊一・長吉。（玄仲は最初の一順のみで、あとは昌俔にかはる。）発句　思ひ出や今朝大ひえに富士の雪。興行年月日は不明であるが、右の顔触れは、元和九年十一月十五日於寿德庵百韻（福井博士「連歌の史的研究後篇」、中村俊定氏「西山宗因の初期の連歌」国語国文・昭九・三）に最も近いといへよう。なほ本書の第一巻より第五巻まではいづれも同年の興行で月日は明記されてゐるが、年記は「同六」としかない。しかし第一は福井博士の前掲書に「元和六年松平主殿々興行山何百韻」として記録されてゐるものと完全に一致するので、他の四巻も同様にすべて元和六年と認められる。

2 近衛様桜御所千句　一冊

明暦四年一月二十八日土橋宗静写。寛永十六年四月十一日の興行で、連衆は梧・玄的以下十三人。宗因の付句七。

3 独吟百韻　一冊（合）

寛永十七年春興行。序によつて前年冬、讃岐下向の次に白峯に詣でたその旅をしのんでの一巻であることが分る。

4 英方宗因両吟百韻　一冊（合）

興行年月日は記されてゐないが、野間光辰教授「連歌師宗因・国語国文・昭二八・九」に寛永十八年九月三十日と記されてゐるものに該当する。発句英方・脇宗因で以下句主を記さない。なほ本書は(3)と合本されてゐるが、外に昌琢の死を悼んだその年寛永十三年の英方独吟「靈鑑」や、年時不明の「英方以省祠吟」も合せられてゐる。

5 於小堀遠江守殿独吟四百韻※　一冊

文祿十二年四月十六日写。寛永十九年九月三日の一日興行で、奥に「右四百韻は小堀遠江守殿にあそばしけると也」とある。前掲野間教授の論文に紹介されてゐるそのもので、第一何船連歌。発句　梅に先初花そめのこゝろ哉。以下第二何木、第三玉荷、第四何路。発句はいづれも三籟集に見えるが詞書はない。

6 妙風庵主追善独吟千句　一冊

慶安二年九月二十三日の序がある。

7 末吉宗覚十七回忌追善百韻※　一冊（合）

慶安二年十二月二十八日興行。発句に昌程の句を申請け、脇は宗久。以下順次に鶩翁・宗因・以春・正音・久任・宥済・道仙・清順・之貞・一通・尊順・執筆の一座で宗因の付句十一。宗久は宗覚の子で三八才。久任は天満西田氏、道仙は平野辻葩氏、清順は末吉氏から奥野氏に入り法橋保悟とよんだ。尊順は天王寺秋野僧。以春・正音・宥済・之貞はいづれも平野住らしく、一通は久任と同様宗因の友人であらう。因に寛文十二年四月於大阪屋敷末吉宗久興行連歌に宗因も一座してゐるといふ。（杉浦正一郎氏・国語国文・昭十一・六）

8 天神七百五十年忌法楽万句三物　一冊

慶安五年二月二十五日興行。本書は第五までを欠く。第十七何心連歌の発句が宗因。宗久をはじめ平野の作者も数多く見える。

9 於権現千句 ※　一冊

承応三年四月五日平野権現社での興行。第一の発句を長秀より請け、連衆は宥済・正音・宗因・以春・宗雄・宗久・以円・清順・之貞・顕成・利広・延明・宥仙等で、宗因の句は各巻十二づつ。うち発句は第十何垣連歌の「神の道弥てり増る庭火哉」で、これは三籟集に「平野郷千句に」として出てゐる。

10 小倉千句　一冊

内題「於豊前小倉城御賀之千句」。二月十七日より二十一日に亘る独吟興行で、年記はないが寛文五年の作。写本三部が蔵せられ、一本は他の写しであるが、その原本（掲出本）は青表紙・美濃紙袋綴である。

11 てぐり舟 ※　四冊

第一・第二の両冊を欠いてゐるが、第五冊までは俳諧発句集。即ち巻第三夏・巻第四秋・巻第五冬である。宗因は「天満西翁」と記して二十首収められてゐるが、もとより三籟集には見えない。因みに平野作者として宗静の外では勝政・安直・重庸・家次・寸計の名が見えるが、それらは土橋家旧蔵の懐紙類には現はれない。俳諧専門の人だったからであらうか。巻第六は始めに「維時寛文十一年辛亥之朱律　阿知子頭成」と記した序があり、「我嶋発句合」につゞく。次いで「寛文九年三月中澣　松山玖也」の序を置いて岩城における「百番俳諧発句合」がある。左右五人づつで玖也が句をもつて加判してゐる。阿誰軒誹諧書籍目録（活字飜刻のものによる）に七冊とあるのに従へば本書は更に一冊を失つてゐるのであらうか。他に伝本を見ない由。

12 西山三籟集　刊本二冊

「享保甲寅霜月　西山氏蔵板」。享保十九年九月の法眼昌廸の跋がある。西山昌林の編で、宗因・宗春・昌察三代の連歌発句集。他に「連歌集」と題する一冊中には、祖白・昌程と共に宗因の加点した「以春独吟百韻」があり、また宗因の跋のある延宝四年六月杉村友春撰「温故日録」刊本六冊も見える。（以下嗣出）

附記。右解説中にその名の出てくる土橋宗信・土橋宗静は、土橋の分家であつて、宗信は宗静の孫に当る。宗静は、通称九郎右衛門、元禄十一年五月二十二日、寿六十三才で歿してをるが、生前、西山宗因の門に遊び、連俳を好んだものの如くである。宗信は、宝暦二年八月八日卒去。土橋友直が含翠堂創設に当つてはその創立発起人に加はり、友直を助けて最も功績のあつた人である。連歌を西山宗春に学んだ。土橋旧蔵書中に連歌書が多数収められ、特に宗因関係のものが集められてゐるのは、恐らくこの二人の力であらう。